

斬られ役

【目立たなくても頑張っていることは、誰かが見ていてくれる】

今日はおさむらいさんが登場する時代劇についての話をします。時代劇などでは、主役といってその劇の中心になる人がとても目立ちます。また、とてもかっこよくて人気もあります。

主役は刀で悪い人を切ったりするわけですが、劇を作るにはきられる役の人も必要です。このような人達をきられ役といいます。きられ役の人は顔が写らないし、注目もされません。名前も覚えてもらえないことが多いのです。今日はこのきられ役を40年以上も演じ続けてきた人の話をします。

この人は、福本清三さんといいます。15歳の時に時代劇を作る会社に入りました。毎日、毎日、画面に映らないけれどただ走るだけ、水の中に浮かんでいるだけ、重いものを背負って歩くだけ、のような役をやっていました。そのうちに、きられ役をするようになりました。その当時は、時代劇がとても人気があり、1日に何回もきられる役をやっていました。ただきられるだけですから、どんな映画かもわからないし、映画の題名も知りません。

ある日の福本さんの仕事の様子です。

「おつかれさん、福本さん。今日はいくつの映画に出たの？」

「8つや。4つはさむらい役、3つはろうにん役で斬られた。あと一つは、斬られた死人の役や」

あまり給料も高くはなく、その日暮らすのが精一杯です。体の具合の悪い日も無理して仕事に行きます。仕事を休むと、きられ役とはいえ仕事が回ってこなくなってしまう。怪我をすることもありました。

毎日毎日斬られています。

ある時、主役をしていた人に「いい演技だ」とほめられました。

福本さんは考えました。

「きられ役が手をぬくと、主役が強く見えない。主役がかっこよく見えるきられ方を工夫しよう」

あまりかっこよくないかもしれないけれど、きられ役は必要なやくなんだ、ということに福本さんは気づいたのです。

それから福本さんは、主役がかっこよく見えるきられ方を考え、工夫し、そして福本さんだけのきられ方を完成させます。それは、斬られてからくると1回転し、カメラに視線を向け、大きく体をのけぞらせて倒れるというものでした。

毎日毎日斬られ役を演じる福本さんは、次第に時代劇に欠かせないきられ役、といわれるようになりました。

60歳の定年を間近にしたある日、福本さんにアメリカのハリウッドで作られる映画に出演してくれという依頼が来ました。俳優なら誰でも夢見るすごいことです。それは「ラスト・サムライ」という映画で、主演のトム・クルーズという人を守るサムライの役でした。目立つ役は一度もしたことのない福本さんが、世界的な映画にでることになったのです。福本さんはその時に「どこかで誰かが見ていてくれるやなあ」と実感しました。

さて、皆さんもクラスや児童会、あるいは家で仕事があると思います。その仕事はいやな仕事のこともあるし、目立たない仕事のこともあります。皆さんは自分にまかせられた仕事をどんな気持ちでやっていますか。いやな仕事や目立たない仕事でも、一生懸命やっていると、福本さんの気持ちがよくわかようになるとと思います。